

## ■れすばす 11月号 クローズアップ

特定非営利活動法人 リトル・ビーズ・インターナショナル

～アフリカのスラムに住む女性や子どもたちに明日への希望を～

11月のクローズアップでは、[特定非営利活動法人リトル・ビーズ・インターナショナル\(LBI\)](#)

をご紹介します。LBIは、ケニアの首都ナイロビにあるスラム地区“コロゴッチョ”で支援活動を行っている団体です。約20万人が居住するコロゴッチョは、世界的なスラム都市・ナイロビでも、極度の貧困状態にあり治安も劣悪な“スラムの中のスラム”として、長らく差別の対象となっていました。LBIのミッションは、そんなコロゴッチョで生活する女性と子どもをサポートし、自立して自らを変えていこうとする力を育てること。今回はLBI代表の高橋郷さんに、コロゴッチョで支援活動を行うことになったきっかけや、支援の成果などについてお話を伺いました。

リトル・ビーズ・インターナショナル (LBI)  
高橋 郷さん



Q. コロゴッチョと関わるようになったきっかけをお聞かせください。

A. 2012年、外務省主催のNGO研修でケニアの国際機関に派遣されていたときのことで、定時に出勤し綺麗なオフィスで仕事をする毎日に、これでは東京にいるのと変わらない、アフリカにいる実感が湧かないという思いを抱いた私は、ケニアで大きな社会問題と

なっているスラムに足を運んでみようと考<sup>かんが</sup>え始めました。そんなある日、ナイロビ市内を散策<sup>さんさく</sup>していたところ、公園<sup>こうえん</sup>で女性<sup>じょせい</sup>たちを集めて話<sup>はなし</sup>をしているひとりの男性<sup>だんせい</sup>に目が留<sup>め</sup>まりました。気<sup>き</sup>になって声<sup>こえ</sup>をかけてみると、その男性<sup>だんせい</sup>はナイロビ郊外<sup>ないろびこうがい</sup>にあるコロゴッチョというスラム出身<sup>らむしゅっしん</sup>のソーシャルワーカーで、スラムに住む女性<sup>すらむじょせい</sup>たちに母子保健<sup>ぼしほけん</sup>の手続き<sup>てつづ</sup>きについて説明<sup>せつめい</sup>していたというのです。そして、このとき彼<sup>かれ</sup>から「せつかく知り合<sup>あ</sup>ったのだからコロゴッチョに来て<sup>き</sup>みないか」と誘<sup>さそ</sup>われ案内<sup>あんない</sup>してもらったのが、コロゴッチョスラムと深く関<sup>かか</sup>わっていく最初<sup>さいしょ</sup>の一歩<sup>いっぽ</sup>となりました。2012年<sup>ねん</sup>12月<sup>がつ</sup>のことです。

**Q. そこからどのようにして、LBIの設立<sup>せつりつ</sup>へとつながったのでしょうか。**

A. コロゴッチョのソーシャルワーカーたちと知り合<sup>あ</sup>い、彼<sup>かれ</sup>らの話<sup>はなし</sup>を聞くうちに、ここがかつてナイロビのゴミ捨て場<sup>ごみすてば</sup>だったことや、コロゴッチョに住む人々<sup>ひとびと</sup>が周囲<sup>しゅうい</sup>から差別的<sup>さべつてき</sup>な扱<sup>あつか</sup>いを受けていることを知<sup>し</sup>りました。コロゴッチョとは、現地<sup>げんち</sup>の言葉<sup>ことば</sup>で「useless=無用<sup>むよう</sup>のもの」を意味<sup>いみ</sup>します。実際<sup>じっさい</sup>にコロゴッチョは、「治安<sup>ちあん</sup>が悪<sup>わる</sup>すぎる」という理由<sup>りゆう</sup>で国際機関<sup>こくさいきかん</sup>の援助<sup>えんじょ</sup>の手<sup>て</sup>が伸びず、NGOなどが活動<sup>かつどう</sup>しても1~2年<sup>ねん</sup>で撤退<sup>てつたい</sup>してしまうという、見放<sup>みはな</sup>された場所<sup>ばしょ</sup>でした。もし、そうした情報<sup>じょうほう</sup>を最初<sup>さいしょ</sup>から知<sup>し</sup>っていたら、私<sup>わたし</sup>もコロゴッチョに足<sup>あし</sup>を踏み入<sup>い</sup>れるのにもっと身構<sup>みがま</sup>えたかもしれません。しかし、コロゴッチョに関<sup>かか</sup>わり始めてから数<sup>すう</sup>か月<sup>げつ</sup>後<sup>ご</sup>、日本で開催<sup>かいさい</sup>されるTICAD（アフリカ開発<sup>あふりか</sup>会議<sup>かいぎ</sup>）に向け帰国<sup>きこく</sup>することになった私<sup>わたし</sup>のために、コロゴッチョの人々<sup>ひとびと</sup>はお別<sup>わか</sup>れ会<sup>かい</sup>をしてくれました。その思い<sup>おも</sup>やりが胸<sup>むね</sup>に沁<sup>しみ</sup>ましたし、帰国<sup>きこく</sup>後<sup>ご</sup>も現地<sup>げんち</sup>から支援<sup>しえん</sup>を求め<sup>もと</sup>める声<sup>こえ</sup>が届<sup>とど</sup>いたことに心<sup>こころ</sup>を揺<sup>ゆ</sup>さぶられました。そして、こうして自分<sup>じぶん</sup>を必要<sup>ひつよう</sup>としてくれる人<sup>ひと</sup>たちがいるのであればと一念<sup>いちねん</sup>発<sup>はつ</sup>起<sup>き</sup>し、有志<sup>ゆうし</sup>に声<sup>こえ</sup>をかけて同年<sup>どうねん</sup>7月<sup>がつ</sup>にLBIを設立<sup>せつりつ</sup>したのです。



LBIはコロゴッチョスラムで懸命に生きる人々との出会いから設立された団体です。

© LBI

Q. LBIのコロゴッチョにおける主な活動内容を教えてください。

A. LBIでは、スラムの中でより厳しい生活を送っている女性と子どもの支援を活動の柱としています。極度の貧困状態にあるコロゴッチョでは、仕事がないためにセックスワーカーとなる女性たちが後を絶たないことからHIVの感染率が約4割と高く、また、半数以上の子どもたちが学校に通うことができません。そこでまず、女性への就業支援として、HIVに感染している若い母親を中心にスクールバッグ等の製作を行い、収入の向上を目指しています。さらに子どもたちへの教育支援として、コミュニティスクール「アマニ(=平和)教育センター」を運営し、学校に通えない子どもの就学を後押ししています。また、貧困からの脱却に環境面からアプローチすべく、循環型コミュニティを目指すための環境教育やセミナー、植林活動なども行っています。

Q. これまでの活動でどのような手ごたえを感じられていますか。

A. アマニ教育センターで学ぶ子どもの数が年々増えてきました(現在250名超)。元々はストリートチルドレンのための学校でしたが、今は両親がいる子どもたちも受けいられます。給食の配給や教科書の配布といった支援を続け、学校の設備も充実してきたことで、「うちの子をあの学校で学ばせたい」と望む親が増えてきたのです。女性グループの

活動も順調に伸び、この7～9月だけでもバッグがマーケットで300個も売れるなど、着実に女性の収入向上につながっています。また、植林活動も1300本以上の苗木をゴッチョの中心部を流れるナイロビ川の河川敷に植えています。こうして地道に活動を続けてきたことで、次第に理解者が増え仲間の輪が大きくなり、活動しやすくなったと実感できるようになりました。



女性グループが製作するバッグは、日本のグローバルフェスタ等のイベントでも販売されます。(左)  
新しい教科書を手にとった喜びの瞬間、アマニ教育センターの子どもたち。(右)

© LBI

Q. 活動の課題となっていることを教えてください。

A. 活動を支えてくれているスタッフはボランティアベースの方がほとんどです。彼らにとって一番切実なのは、「今日明日の食事をどうするか」という目の前の問題ですから、いま行っている活動が将来につながり、後々自分たちのコミュニティを守ることになるとわかっているにもかかわらず、やはり継続性という点でなかなか難しいところがあります。また、治安の面で不安があるのも事実です。若年層のギャング化は深刻ですし、マフィアのような団体も複数あり、私のような外部からやってきた人間に金銭を要求してきます。その圧力に屈しないでいると、事務所に泥棒に入られたり、リーダーの自宅に嫌がらせをされたり、私自身も暴漢に襲撃されたりしました。さらに、悪い意味で「援助の知識だけは豊富」という人も

すくなくありません。“もらうのが当たり前”という前提で関わってくる方も多いでし、セミナーを開催すると「ケニアでは参加者にお礼のお金を渡すのが当たり前」と譲らない人もいます。自立と自律を自指した参加型のコミュニティ活動を推進していくためにも、そういった現実と理想のギャップを埋めていくのが一番大変な作業だと感じています。

Q. 厳しい現実に関心折れることなく、活動を継続してこれたのはなぜでしょうか。

A. 今、4年目に入っていますが、活動を続ければ続けるほど現地の人たちとの関係性が深まっていくので、持続性につながる良い循環が生まれてくるように、くじけそうになってもやってみよう、頑張ろうという気持ちが芽生えてきます。それに現地のリーダーたちが私よりずっとつらい状況で負けずに頑張っているのに、私が先に白旗をあげるわけにはいきません。LBIの活動を支えているリーダーたちのほとんどは女性です。ケニアのスラムの女性たちは実にパワフルで教えられることが多いんです。勤勉で、真面目で、本気でコミュニティのことを考えて活動に参加してくれる。なかなか満足な給料を払うこともできないのに頑張ってくれている現地のリーダーたちには、本当に感謝しています。私は彼女たちに引っ張ってもらって、ここまで活動を続けていくことができました。



定期的にワークショップやセミナーを開催しています。

Q. LBIの今後の活動予定や目標をお聞かせください。

A. まずは、現在建設中のアマニ教育センターの校舎を無事に完成させたいです。LBIの活動はまだまだサポートが必要ですが、いずれは日本からのリソースに頼らず自分たちだけで運営できるようになってくれればと願っています。コロゴッチョの治安はいくらか良くなったと言われており、政府のプロジェクトで道路も整備され始めるなど、状況は少しずつですが改善してきているようです。とはいえ、インフォーマルなスラム地域では、児童レイプといった耳をふさぎたくなるような痛ましい事件や出来事もたくさんありますので、こうした問題の根絶にも取り組んでいきたいと思っていますし、そうしなくてはならないと強く感じています。